

『夜獣の刻印』

著:あさひ木葉

ill: 小路龍流

泰明は、苦々しげに言う。

「とにかく、帰ってくれ。俺はヤクザになるつもりはない。なりたくもない」

「それは困ります。あなたは組長になるべき人ですから」

「母親と同じように、俺にも身売りしろって？」

不愉快さを丸出しにして、泰明は言う。

「あなたに、我々の旗印になっていただきたい。これは先代の意思であり、あなたの生まれる前からの約束事です」

「俺は聞いていない」

「それでも、我々にはあなたしかいないんです。あなたのほうにもいろいろな感情がおりありますが、ゆっくり話し合って、誤解を解いていけば」

「誤解も何も」

多賀城の言葉を、泰明はさっと遮った。

彼は、自分の意思を譲らないだろう。

でも、泰明にだって譲れないものがあるのだ。

「真実っていうのは、人の数だけあるんだ。一つの事象を様々な角度から見れば、いろんな見解が出てくる。俺や俺の母親にとっては、組のために身売りさせられたというのが真実だ。そして、あんたたちにとっては、言うことを聞かなかった我儘(わがまま)娘を遠くからお守りしてやったという美談が真実、と。そういうことなんだろ？ 誤解なんかじゃなくて、立場の違いだ。意見のすりあわせも何も、こんな状況でできるはずがない。諦めろ」

泰明は、ぱっさりと切り捨てる。

「それでは困ります。大勢の命がかかっています」

「母さんが身売りさせられた時と同じように、か」

「」

多賀城は無言で、泰明を見据えた。

泰明の祖父に、多賀城が心酔しているというのは、おそらく嘘ではないだろう。

泰明は察しが悪いほうではない。祖父を非難するたびに、多賀城の表情があからさまなほど変化するのは見てとれた。

(人格者、ね)

聞いていて笑いだしてしまいたくなるくらい、薄っぺらな人格者もいたものだ。

娘を売り、孫の将来を勝手に決めておいて、人格者も何も無い。

(俺は絶対に、こいつらの世界の人間にはならない)

感情的に、受け入れがたい。

今の人生を捨ててまで、彼らの駒として使われるのはごめんだ。

「なんとおっしゃられようと、かまいません。私を憎んでいただいてもいい。しかし、抗争は避けなくてはならない。私も、ここで引くことはできません」

「で、俺に犠牲になれっていうのか？」  
嘲笑すれば、多賀城は目を据えた。  
「ただ犠牲になれとは、申し上げます」  
泰明は眉を上げる。  
多賀城は、何か腹を括ったような雰囲気だ。  
声のトーンが、今までとは違う。  
語調を荒げているわけではないが、芯の強さを感じる声だ。  
「私は、筋を通してほしいとお願いしているのです」  
多賀城が引かないのは、よくわかった。  
だが、泰明も折れるつもりはない。  
「俺は、筋を通すも何も、一切お断りだと言っているんだ。なんで会ったこともない祖父のせいで、人生決められなくちゃいけないんだ」  
「話し合いの余地はない、と？」  
「何度も言わせないでくれ」  
「なるほど、あなたのお気持ちはよくわかりました」  
多賀城は、肩を落とす。  
「しかし、私もこのままでは帰れません」  
「詰め腹切るのは勝手だが、ここではやらないでくれ」  
泰明は、犬を追うかのように手を払ってみせる。  
これ以上、彼らと関わりたくはなかった。  
「確かに、あなたには私たちに逆らう権利がある」  
多賀城は、冷ややかな笑みを浮かべた。  
「そして、私もまた、あなたに逆らう権利がある。どちらも譲れないということでしたら、力尽くで言うことを聞いていただくしかないですね」  
「力尽く？ 勝手なことを言うな」  
「それを、あなたがおっしゃるんですか」  
多賀城は、冷ややかな眼差しになる。  
「あなたが自分の自由を守る権利があるというように、私には大勢の命を守る義務があるんですよ」  
多賀城は、眼鏡を外した。  
切れ長の眼差しを直に見れば、鋭さが増す。  
あまりにも鋭すぎて、恐怖を感じるほどに。  
「あなたはとてもプライドが高く、頭の回転も悪くない。そして、何よりも会社員としての自分を守りたいと思っている。実の肉親に対しての情は、まったくない」  
「なんだよ、心理分析の真似事か？ 言うておくが、あんたたちが嫌いなだけだぜ。情が濃(こま)やかではないが、たとえば周りの人間や、母親には人並みの情を持ち合わせてるぞ。特に母親は、あんたたちに壊された、可哀想な人だから」  
「単なる現状把握です」  
多賀城は、泰明に近づいてきたかと思うと、無理やり肩を掴んだ。  
「先代が何を思い、我々が何に希望を見いだしているのか、話を聞く気がないほど、あなたは我々に敵対心を持っている」  
「敵対心っていうか、嫌いだし、何より迷惑なんだ。俺の人生に関わらないでいてくれ

ればそれでいいのに、どうしてこうやって関わってこようとする」  
「それは、我々にも事情があるからです。あなたをどうしても連れて帰らなくてはならない事情が」

ヒステリックに罵られるほうが、マシかもしれない。  
多賀城の声は静かだが、揺らぎようのない意志を感じた。

「っ」

肩を掴む手に力を加えられ、泰明はさすがに表情を変えた。  
暴力に至るような雰囲気ではない。しかし、この力はただごとではなかった。  
身の危険を感じる。多勢で拉致でもする気か。  
しかし予想外に、多賀城は自分の部下たちに部屋から出るよう指示をした。  
そして、二人きりになる。  
多賀城は、じっと泰明の顔を見つめた。

「あなたの未練、全部壊して差しあげますよ」

「何を言っているんだ」

「今までの人生、すべて捨ててください。そのかわり、私も、私の部下たちも、あなたにすべてを捧げますから」

ぞっとする。

自分を見つめる切れ長の瞳に、隠しようもない狂気を感じた。

「そんなの、取引にもならない。迷惑だ！」

「迷惑だろうと、受け取っていただく」

「なっ」

ソファに押しつけられて、泰明は狼狽(ろうばい)した。

この姿勢は、まさか？

「まずは、あなたの弱みを握らせていただきますでしょうか」

「何をやる気だ、やめろ！」

泰明は、もがくように抵抗する。

これ以上は、いくら男同士とはいえ、シャレにならない。

「プライドの高いあなたには、おそらく一番効き目がありそうなことですよ」

罵詈雑言(ばりぞうごん)は、強引すぎる口づけに奪われた。

本文 p48～54 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>